



Title	漢籍古鈔本における漢字音の基礎的研究：鎌倉・南北朝時代加点の經書類を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	鄭, 門鎬
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14569号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81133
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Munho_Jung_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 鄭 門 鎬

主査 特任教授 池 田 証 壽
審査委員 副査 准 教授 李 連 珠
副査 教 授 弮 和 順

学位論文題名

漢籍古鈔本における漢字音の基礎的研究
—鎌倉・南北朝時代加点の経書類を中心に—

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は鎌倉時代から南北朝時代までの約 200 年間に書写・加点された漢籍経書類の古鈔本 21 種を対象として、それらに施された漢字音注記（仮名音注、声点、『經典釈文』の音注利用）を収集整理して、体系的に記述したものである。日本漢字音は、呉音、漢音、唐宋音などの多層からなるが、その中核をなすのは漢音であり、多くの研究が積み重ねられてきた。近年は、平安時代以来の古鈔本に施された漢字音注記の収集整理が格段に進展し、韻書（『切韻』『広韻』および『韻鏡』）から演繹的に導き出される音形とのズレが生じる理由に、中国語における音韻の変化の反映、典籍の種類（仏典、漢籍、国書、字書類）による学習音・伝承音の相違、漢字音の日本語化によってもたらされる片仮名表記の変化などがあることが分かってきた。このような日本漢字音の研究動向の中で、次に記載する成果をあげることができた。

第一に、鎌倉時代から南北朝時代までの約 200 年間に書写・加点された漢籍経書類古鈔本 21 種の原本または写真版に基づき、実証的な方法により、漢字音注記（片仮名、声点、『經典釈文』の音注利用）を収集整理し、そのすべての用例の一覧表（「分韻表」という）をまとめあげて、研究資料として提供した点をあげることができる。これは約 160 頁の資料篇に結実している。漢音研究の成果として評価の高い佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 資料篇』（2009 年）が 4 種の典籍の「分韻表」をまとめているのと比較すれば、本論文が古鈔本 21 種を対象にまとめあげたのは驚異的と言える。

第二に、漢籍経書類の古鈔本としては、『論語』7 種、『古文尚書』5 種、『孝経』9 種を対象として、同一典籍での学問集団・時代・地域等の相違を記述した点をあげることができる。これら経書類は、大学寮で講義されたが、平安時代以来、その任にあたったのは主として清原家と中原家の出身の博士である。鎌倉時代以降、東国で加点される資料、仏教寺院で加点される資料も出現して、それらの様相を記述観察することを可能にしたことは、今後、他の漢文典籍の漢字音を研究する方法を提示したものとして高く評価できる。

第三に、漢字音注記を仮名音注、声点、反切の三つに区分し、仮名音注 10 項目、声点 4 項目、『經典釈文』の音注利用 1 項目、計 15 項目の分析視点を提示したことをあげることができる。仮名音注は、非鼻音化の揺れ、歯音字（サ行音）における表記の揺れ、合口字の表記、ハ行転呼音による表記の混同、「㊦ヨウ」と「㊧ウ」の混同、長母音表記、m・n 韻尾字の表記、促音化、t 韻尾の仮名表記、呉音・百姓読みの混入の 10 項目である。声点は、軽声点の加点、上声全濁字の去声化、濁声点の加点、非規範的な声点の 4 項目である。『經典釈文』の音注利用 1 項目は、さらに反切と同音注に分けられる。これら 15 項目は個別にとりあげて、単独の論文としたり、一章としたりすることも可能なものであるのに、簡潔な記述に徹し憶測を慎んで論述する姿勢は、研究者としてのすぐれた資質を示している。

以上、要するに、大局的観点から資料選定を行って、漢字音注記を体系的に記述した点、古鈔本

を解説しその年代判定等の文献調査の基礎を踏まえて一つ一つの用例を丁寧に分析した点、それに見あった論文の構成とした点、これらの点に本論文の美点があるということができよう。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文の成果は、訓点語学会と韓国口訣学会などで口頭発表し、その一部は訓点語学会の機関誌『訓点語と訓点資料』に掲載されており、一定の評価を得ている。口頭試問に際しては、音韻研究の観点から専門用語や用例の解釈を質し、儒教経典研究（経学）の観点から資料の選定基準を質したが、いずれにも的確な説明を行っており、十分な研究水準にあることを確認した。本論文の日本語表現がすぐれている点も評価された。

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。